特集
知的障害者の余暇をめぐる状況と論点
丸山啓史

要旨
知的障害者の余暇に関しては、余暇活動の場の狭さが指摘されてきた。テレビを眺めたり、音楽を聴いたり、ゲームをしたりして余暇を過ごす人が多い。余暇についての家族の役割が問われる。最近ではデジタルヒプノスの活用が指摘され、余暇のさらなる充実について考えていく必要がある。そのために重要になるのは、余暇活動の観点に目を向けることである。

余暇活動に参加する人の求めにある着目することが求められる。消費消費と結びついた余暇への利用的視点をもうることも必要である。また、障害の程度によって困難を免がらない、余暇活動の拡大を支えていることが示される。

余暇活動を研究する本研究の目的は、余暇活動の拡大を支える要因を明らかにすることである。本研究の主な目的は、余暇活動の拡大を支える要因を明らかにすることである。本研究の主な目的は、余暇活動の拡大を支える要因を明らかにすることである。

はじめに

人間の生活を「日常生活（労働など）」「住宅」「余暇」といった3領域に区分し、それぞれの充実を必要とすると見れば、現代社会において広く受け入れられるものになっている。しかし、障害者の生活に関する議論は、日常生活や住宅、余暇といった3領域に分類し、それぞれの充実を必要とすると見れば、現代社会において広く受け入れられるものになっている。しかし、障害者の生活に関する議論は、日常生活や住宅、余暇といった3領域に分類し、それぞれの充実を必要とすると見れば、現代社会において広く受け入れられるものになっている。

そこで、障害者の生活に関する議論は、日常生活や住宅、余暇といった3領域に分類し、それぞれの充実を必要とすると見れば、現代社会において広く受け入れられるものになっている。しかし、障害者の生活に関する議論は、日常生活や住宅、余暇といった3領域に分類し、それぞれの充実を必要とすると見れば、現代社会において広く受け入れられるものになっている。

1 余暇をめぐる状況

(1) 余暇の内容

知的障害者の余暇に関しては、30年以上前、大谷（1983）が「知的障害者と余暇」の高齢部が余暇を増やすよう要望している。そこで、余暇を増やすためには「余暇行動」としては「テレビ、レコード・ラジオ、家族との関係がある」ということが分かっている。

(2) 余暇の程度と余暇の実態

知的障害者の余暇の実態を把握するうえでは、知的障害の程度に関心を払うことも必要である。